

沖縄、羽地大川地域の農地・河川および水源整備の変遷と農村整備の重要性 Vicissitudes of Agricultural Land, River Systems, and Water Resource Facilities in the Haneji Okawa Region of Okinawa and the Significance of Rural Development

狩俣壮志朗, 中村真也
Soshiro Karimata, Shinya Nakamura

1. はじめに

近年、我が国の農村地域では、農業人口の減少や高齢化、自然災害の激甚化といった複合的な課題が顕在化している。こうした状況の中で、農村整備は単なる農業インフラの整備にとどまらず、地域の持続可能性を支える重要な取り組みとして注目されている。特に水資源や農地、河川といった自然環境と深く結びついた整備は、農業の生産基盤を安定させるだけでなく、地域の防災力や環境保全にも寄与するものである。沖縄県名護市の羽地大川地域は、豊かな水系と農業資源に恵まれながらも、過去から現在に至るまでさまざまな整備事業が実施されてきた地域である。本研究では、羽地大川地域における農地整備、河川改修および水源開発の変遷や整備に至るまでの歴史的背景を明らかにし、現在の課題についても考察する。

2. 羽地大川地域の農村整備の歴史

2.1 蔡温の河川改修工事、2回目の改修事業

1735年の台風で羽地大川が氾濫し、水田が約6kmにわたって流される被害が発生した。これを受け、琉球王国の士官・蔡温は氾濫の主な原因となっていた合流地点を差し分ける河川改修工事を行った。さらに風水思想を活かして川の流れを曲線に整え、河川の流れを緩和させた。また用水路・貯水池・橋を建設し河川の形を保つため管理に関する条文も定めた。しかし琉球処分後に首里王府が解体され、土地の私有化や山の開墾が進んだことで山の保水力が低下し、斜面崩壊や河川の氾濫が再び起きる。これにより水田の荒廃や用水の確保が難しくなり、1917年には住民によって羽地大川耕地整理組合が設立され、河川の流路を大きく変える工事が始まった。工事は災害の影響で中断もあったが、1938年に完了した。

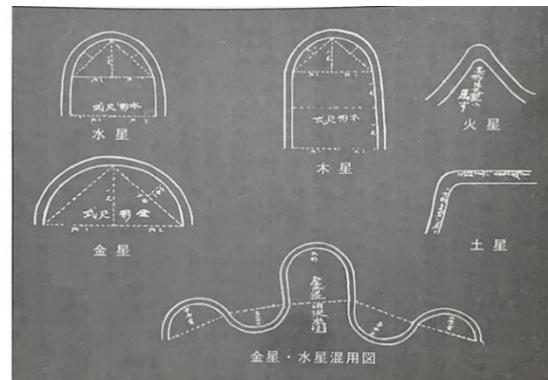


図1 蔡温の風水思想（羽地大川修補日記）

2.2 羽地ダム・真喜屋ダムその他かんがい施設の設置

戦後、羽地地域では台風や豪雨、渴水の被害が頻発し、治水・利水の課題が深刻化した。河川の位置が変わっても氾濫や堤防決壊が続き、断水もたびたび発生した。農業では園芸作物への転換や水田地帯の水不足が問題となり、安定した水供給が必要とされた。これを受け、取水施設や用排水路、貯水施設の整備が進められた。1976年には羽地ダムが洪水調整や灌漑・飲用水の供給を目的に建設され、その後1985年からは真喜屋ダムや用水路などを整備する国営かんがい排水事業が行われ、農業の安定化と生産性向上が図られた。

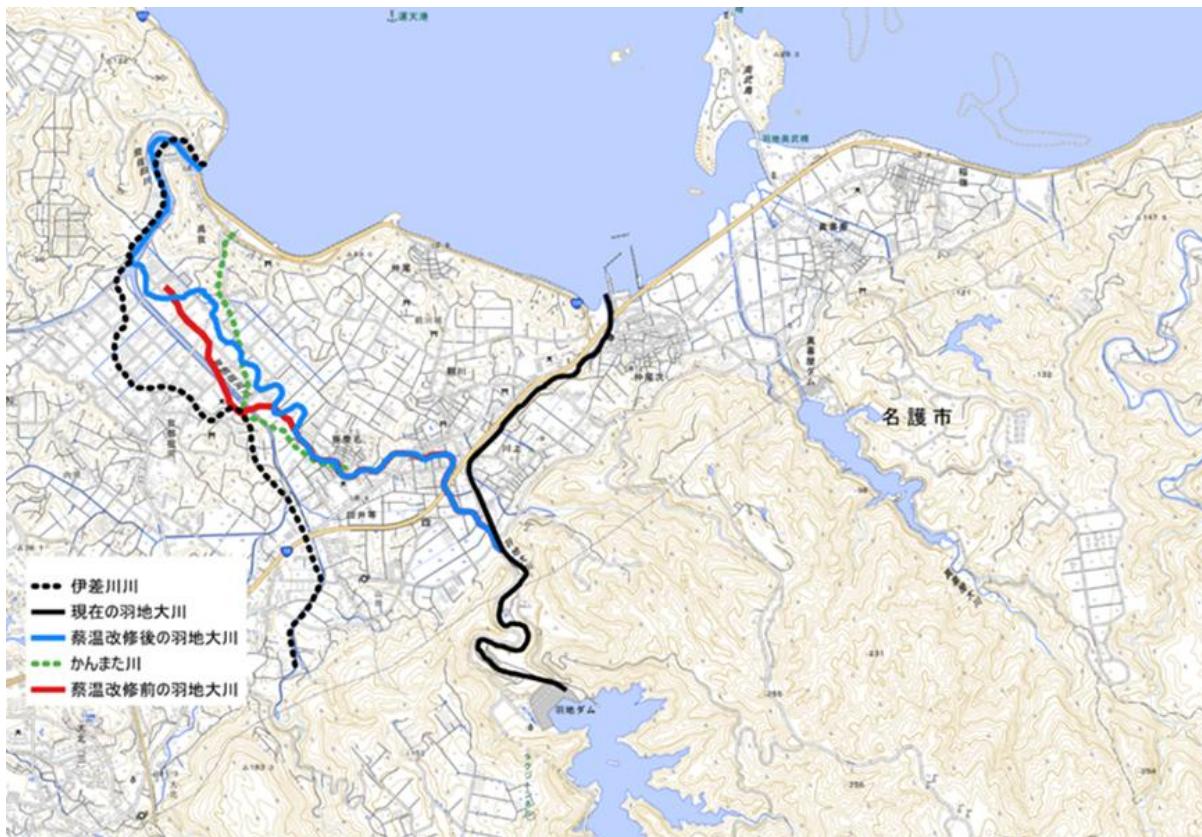


図2 羽地大川の流路の変遷（地理院地図（標準図）に河川図を加筆）

2.3 令和6年度北部豪雨による比地川氾濫の被害

沖縄県国頭村では令和6年11月8日(金)～10日(日)に豪雨災害が発生した。特に大きな被害を被った国頭村比地川では河川の氾濫が起き床上浸水が10棟、床下浸水が20棟の被害を受けた。国頭村は県に対して3年前から3度にわたり比地川の浚渫工事を行うよう要請していたが、他地域を優先していたため工事は行われていなかったことが分かった。このような被害を被ったのは浚渫工事が後回しにされたことが原因だと考えられる。

3.まとめ

比地川において、蔡温によって行われた河川改修や水管理は、風水思想に基づいて安定化が図られていたが、琉球処分後に管理体制が崩れ、山崩れや洪水の被害が発生した。戦後も台風や渇水、灌漑施設の未整備などが課題となつたが、ダム建設や設備の整備により改善が進んだ。しかしながら、現在でも「山崩れ」や「河川の氾濫」など過去と同様の自然災害が繰り返されている。これらの被害を防ぐためには、「継続的な維持管理」や「徹底した管理体制」の確立と実行が不可欠である。さらに今後は、こうした体制を支えるための地域における安定した財源の確保が重要な課題であり、その実現には地域住民の理解と協力の獲得が不可欠であると考える。

参考文献

羽地大川一山の生活誌 調査委員. 「羽地大川一山の生活誌」. 丸正印刷. 1996. p21~48
豊見山和行他. 「名護市史料館編5 文献資料集1 羽地大川修補日記」. 名護市教育委員会文化課市史編纂係.. p7~4